
JLTA Newsletter No. 25

日本語テスト学会

The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 25 発行代表者：Randy Thrasher 2006年(平成18年)5月20日発行
発行所：日本語テスト学会 (JLTA) 事務局
〒389-0813 長野県千曲市若宮 758 TEL 026-275-1964 FAX 026-275-1970
e-mail: youichi@avis.ne.jp URL: <http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html>



入試はビジネス？

柳瀬陽介 (広島大学教育学研究科)

研究社の英文学・英語学専門誌『英語青年』が、2006年4月号で「大学入試英語問題を批評する」を特集した。こういった特集の場合は、優れた専門家、実践家、見識家に並んで、一種の道化者が執筆して、全体の調整を図ることがしばしばある。道化役としてなら万年勉強不足の私でも許していただけるだろうと私も執筆させていただいた。今回もこのコラムには、研究力のないピエロとして妄言の続きを書かせていただく。

私の『英語青年』記事のポイントの一つは、入試はビジネスにできるということだ。この場合のビジネスとは、(1)大学広報というビジネス、(2)入試作成代行会社の設立というビジネスの二つの意味を持つ。

(1)の広報に関していえば、各大学が、分かりやすい文章で、入試英語の趣旨をできるだけ明確、具体的に説明する。「私たちは、現代社会においては、以下のような理由で、以下のような英語力が重要であると考えます。よって、英語入試問題は以下のような原則に基づいて出題します」といった宣言を大学の内外にする。入試問題の解答公表さえままならない現状で、このような提案は、非現実的に聞こえるかもしれないが、もしこういった表明を行えば、それは、英語教育の明確な指針を示す大学という評判を得るよい広報活動となるだろう。テレビや雑誌のイメージ広告よりは、はるかに有効な大学広報ビジネスではあるまいか。

この(1)の指針表明が行えれば、テストの実施は第三者に委託することができる。これが(2)の入試作成代行会社の設立である。テストの目的さえ明確なら、その目的に最も適い、最も合理的・経済的なテストを専門家として作成するだけの力量をテストングの専門家は持っている。専門家集団が、会社として各大学の入試作成を、こそこそではなく、堂々と代行するわけである。

私は、入試作りをテストングの専門家だけに任せろといっているのではない。そうではなくて、テストングを専門としない英語教育関係者は、(1)の指針決定のために、いろいろと議論し、世間になるほどと思われる見識をつくり上げ、テストングの専門家は(1)に基づいて(2)の具体的な作成に責任を持つべきだということである。

この提案の背後には、テストングとは科学であるという認識がある。マックス・ウェーバーの考えを鵜呑みにするなら、科学とは「価値自由」な試みであり、価値決定には禁欲しなくてはならない。だが入試といった教育事象は、まさに価値決定を含むものであり、そこでは非科学的といったら反感もかうかもしれないが、人文社会系の議論が必要なのである。人文社会系学者と科学的研究者がそれぞれの仕事をすれば、そこにビジネスが生じるかもしれないと私は考える。妄言多謝。

JLTA 第 21 回研究例会の報告

場所：東海大学湘南校舎
1 号館 2 階 B 翼 205 教室
日時：2005 年 7 月 2 日(土) (13:30~17:30)
研究例会テーマ：「学校教育とテスト」
司会：藤田智子先生

第 21 回研究例会が、平成 17 年 7 月 2 日(土)に東海大学湘南校舎にて開催されました。「学校教育とテスト」というテーマのもと、4 名の発表が行なわれました。20 名ほどの参加者が得られ、4 名それぞれのご発表の後には、活発な質疑応答が行なわれました。

各発表の詳細については、筑波大学の平井明代先生と桃山学院大学の島田勝正先生にご報告をお願い致しました。ご快諾下さった両先生、ありがとうございます。

今回の JLTA 第 21 回研究例会の開催は、東海大学様におかれましては、「英語教育を地域の中高教員に発信する新しい形の FD (Faculty Development) プロジェクト」の一環でもあったとのことで、複数の中学・高校の先生方のご参加も得ることができました。

なお、今回の JLTA 第 21 回研究例会の開催にあたりましては、東海大学様より、開催場所の提供の他、補助を賜りました。学会を代表致しまして、学会事務局からも厚くお礼申し上げます。

会場校の藤田智子先生、松本佳穂子先生、どうもお世話になりました。

日本言語テスト学会 事務局

- (1) 「問題文と選択肢の提示時期がテストパフォーマンスに与える影響：項目特性との関わり」
柳川浩三 (神奈川県立伊勢原高校、早大院)
- (2) 「オープンソースの e ラーニングソフトウェア moodle をベースにした itembank モジュールおよび cat モジュールの開発」
秋山 實 (e ラーニングサービス)
今井新悟 (山口大学国際センター)

JLTA 第 21 回例会の最初の発表は、柳川浩三先生による「問題文と選択肢の提示期がテストパフォーマンスに与える影響：項目特性とのかかわり」についてであった。2003 年度 TOEIC のリスニングテストを受験した等質の 3 グループに、Form 1 (問題文と選択肢)、Form 2 (選択肢のみ)、Form 3 (問題文のみ) の異なる提示方法で、短いダイアログを聞かせた。その結果、Form 1 と Form 2 の間に有意傾向 ($p = .066$) が見られたため、さらに詳しくどのよ

うな項目変数が項目困難度に影響を及ぼしているのかを様々な角度から調査された。そして、錯乱肢(distracter)に本文中の正解を導く部分を想起させる単語が含まれる(Lexical Inference in Distracters)場合に、困難度が提示形式で有意に変動することを突き止められた。しかし、全体的に中位、下位レベルの英語力の被験者が、選択肢のみの提示でわずかに影響を受けたものの、提示形式を変えてもテスト得点に有意に影響しないとのことであった。また、結論部分で Form 3 が、Form 1 とまったく有意差がなかったことから、予め選択肢を読まなくても変わらないとの言及から、テストを受ける際のストラテジーにまで示唆され、興味深い発表であった。現行の三大標準テスト TOEFL、TOEIC、英検のリスニングセクションが問題文と選択肢の提示形式が様々あることから、たいへん重要なテーマであり、モノログや長い会話文の場合は、問題提示の違いによる影響を受けるのか、氏の今後の研究が楽しみである。

次は、e ラーニングサービス代表の秋山實先生による「オープンソースの e ラーニングソフトウェア moodle をベースにした tlap モジュールおよび cat モジュールの開発」についての発表であった。教育ツールソフトの moodle とは何かから始まり、教員が自分で moodle を使って問題を作成し、それをオンライン上で学生に受けさせる機能、tlap モジュールによる得点計算機能、分析結果を保存する item bank 機能、学生の能力に合った項目が次に出题される仕組みになっている cat (computer-adaptive test) モジュールについてまで丁寧に説明していただいた。中でも、item bank に、自ら作ったテストを学生に受験させ、その結果をそのまま手を加えずに tlap モジュールを使って必要な項目情報(困難度、弁別力、実効選択肢数など)を計算・保存し、次のテスト作成時にその情報を参照することができるお話は、筆者も別の item bank ではあるが使用し、その必要性を実感していることからたいへん興味がそそられた。また、共同開発者の今井先生のおられる山口大学国際センターで実際に稼働している CAT モジュールの仕組みの説明はわかりやすく、各学生がインターネットを使用する環境であればどこからでも短時間で受験し、レベル判定を受けることができる利用価値の高いものであった。秋山氏は、オンラインテストの作成、分析、実施をさらに容易するため、さらなる改善を加えられるとのことで、教員にとって大きな可能性を秘めた教育ツールであると感じた。moodle、tlap および cat 等の詳しい情報は、合資会社 e ラーニングサービス (<http://www.e-learning-service.co.jp>) から入手できるとのこと。

報告者：平井 明代(筑波大学)

(3) 「ライティング能力の評価について」
松本佳穂子(東海大学)

松本氏は、ライティング能力の理論的枠組みについて説明した。まず、ライティング能力を構成する要素として、文法、語彙、表現、文脈、情報構成、説明力、問題解決能力を挙げた。つづいて、一般認知能力と文化的思考様式との関係について、Contrastive Rhetoric から Intercultural Rhetoric へと主張する Connor(1996)に言及した。また、ライティング能力が Canale and Swain(1980)や Bachman(1990)のコミュニケーション能力の枠組みのどの下位構成要素に関与するかについて説明した。

次に、ライティング CBT テストの可能性について、(1)並べ替え、(2)状況を与えた英訳、(3)クローズテスト (4)cohesive な sentence alignment を問う、(5)cohesion と文脈を問う等のテスト項目について具体例を挙げながら説明した。CBT では「どうしても知識を問う受動的な段階から抜けきれず、自由作文にまさるものはないし、TWE@には程遠い」ということであったが、今後の開発に期待したいところである。

さらに、Halliday の (1)reference, (2)substitution, (3)conjunction, (4)lexical cohesion という4つの cohesion をライティング評価に応用する試みについて説明した。その後自らが編集メンバーとして執筆した高校用ライティング教科書の一部を例示しながら、文脈やパラグラフの概念を教える重要性を訴えた。高校生にとっては、主題文が書かれているか、支持文が十分にあるか等のチェック項目が有益であろう。

最後に、学生は文法や語彙などの一文レベルのフィードバックを求める傾向が今だに強いこと、日本人教師と外国人教師との評価のズレの研究について評定者間信頼性の観点から触れた。

フロアからは、ライティング能力の評価観点に内容(content)を含めるべきか否かという質問があったが、背景知識により差が生じないようなトピックを与えれば、内容を含めることに問題はないし、それは自己表現力の大切な部分である、という回答であった。

報告者：島田勝正(桃山学院大)

(4) 「『絶対評価』はダイジョウブか!?, 『相対評価』はダメなのか!？」

中村洋一(常磐大学)

中学校にいわゆる絶対評価が導入されて3年が経過した。大修館書店の月刊誌『英語教育』の最新号(2005年7月号)の特集は「『評価』のゆくえ」である。その表紙に「今こそあらためて『評価』を問う」とある。中村氏の発表は、この文言に対するコメントから始まった。氏は絶対評価が提案された時点から導入に疑問を感じていたわけである。

絶対評価導入にともなう氏の問題意識は、設定された学習行動目標、分割点が事前に生徒に伝わっているか、指導と評価の一体化というが評価ばかりの授業となっていないか、絶対評価のための測定方法が研究されて具現しているのか、通知票のKR情報は十分か、内申書について学校間格差が生じていないかという点にある。

つづいて、氏は、相対評価のための測定方法として、1発勝負の試験よりも模擬テストの成績の方が信頼できるのではないかと、また、相対評価のためのデータ分析として、偏差値の算出式を知らないとか、素点を単純に合計して1点の重みを是正しないなどの教育現場側の問題点を指摘した。

今後の課題として、学年別到達目標の作成、出口テストの導入などに言及した。

フロアからは絶対評価が導入されて生徒がどう変わったかという波及効果や、習熟度別クラス編成に対して生徒がどう思っているのかなどを実証的に検証することが必要であるという意見が出された。絶対評価導入による学校現場の混乱は、学習の記録としての指導要録と入学選抜試験の資料としての調査書という2つの異なる機能を一元化しようとしたところにあるのではなかろうか。

報告者：島田勝正(桃山学院大学)

JLTA 第22回研究例会の報告

第22回研究例会が、2005年12月10日(土)に慶應義塾大学日吉キャンパスにて開催されました。沖縄から日帰りというハードスケジュールの中駆けつけて下さった会長の Thrasher 先生による開会の挨拶から始まり、「大学英語教育における英語テストの役割」という例会テーマのもと、大学院生によるフレッシュな発表から豊富な教育・テスト作成経験を持つベテランの先生による発表まで、多様な発表を聞くことができました。フロアからも質問や意見も続々と出されました。

各々の発表については、以下に報告を記載致します。当日直前の依頼であったにもかかわらず「報告」の執筆依頼をご快諾くださった先生方、どうもありがとうございました。

また、今回の例会に関して、プログラムの作成や会場のご提供をはじめいろいろと骨を折ってくださった、副会長の中村優治先生(慶應義塾大学)にも、この場を借りてお礼申し上げます。

報告者：学会事務局

研究発表 1

「読解量と発表語彙力の関係」

葉田野不二美 (東京学芸大学大学院)

本研究は、「文章を読みこなした量」と「発表語彙力(自由英作文に見られる語彙力)」の関係について、次の2点に関して調べた。(1) (平均的な語彙力レベルの高校生について)まとまった文章を読んでいる学習者は、読んでいない学習者よりも、作文に出現する総語数が多いかどうか。また、使用語彙の多様性は豊富であるかどうか。(2)文章をより多く読みこなしてきた学習者は、語義学習や例文学習重視の学習者よりも、発表語彙力があるかどうか。

「報告」の紙面の都合上、それぞれのリサーチ・デザインは詳述できないが、結果は、(1)まとまった文章を読んでいる学習者は、そうでない学習者と比較して、作文の総語数や使用語彙の多様性において統計的に有意に優れているとは言えない。(2)文章をより多く読みこなしてきた学習者は、語義学習や例文学習重視の学習者と比較して、作文の総語数や使用語彙の多様性において統計的に有意に優れているとは言えない。ということがわかった。

この結果に関して、フロアーから、「もしかすると被験者に書いてもらった作文のトピックや実施方法に改善の余地があって、この点を改良すれば作文の総語数や使用語彙の多様性においてもっと差がでてくるのかもしれない。」という意見が出された。一方で、「文章をより多く読みこなしてきた学習者は、多分受容語彙もしくは知識としての語彙は増えているはずだが、『言語活動』をしていなければ、読書量を増やしたからといっても産出語彙は増えない、ということを示唆しているのかもしれない。」といった意見も出された。

報告者：片桐一彦 (専修大学)

研究発表 2

「語彙テストにおける言い換え問題と空所補充問題の比較」

森本 由子 (筑波大学大学院)

本研究では、語彙テストにおいて、文脈が難易度や正解率にどの程度影響を及ぼすかを、言い換え問題と空所補充問題を比較することで検証した。検証すべき問題は、おなじ文脈を使用した言い換え形式と空所補充形式の多肢選択語彙テストにおいて、難易度、錯乱肢の働き、また正解率が異なるかどうか、また、言い換え形式の中でも文脈の手がかりで正答率が異なるかどうか(手がかりにならないほうが難易度は高いという仮説)、ということであった。

形式と目標語と文脈という要素を基に、それぞれの要素で異なったテストタイプに組分け、3種類のテストを被験者に受けてもらい、分散



分析、カイ二乗検定や多重比較を行った。その結果として、文脈が手がかりとなり得る言い換え問題は空所補充問題よりは難易度が低く、錯

乱肢の働きはほとんど異ならなかった。正解率に関しては、目標語の頻度により難易度は交差するが、言い換え形式の中でも文脈が手がかりにならない場合は、なる場合よりも難易度は高いという仮説は支持された。また、語彙の頻度以外の点からの考察も今後の課題として言及され、語彙知識の正確な測定を促す意欲的な発表であった。

報告者：宮崎 啓 (慶應義塾高校)

研究発表 3

“L2 Vocabulary Knowledge and Authentic Academic Text Comprehension”

Chiyo Hayashi (International Christian University)

Chris Sheppard (Daitobunka University)

Among many university faculties here in Japan, neither the concept of “English for Academic Purposes” nor “content-based EFL curricula” are particularly new approaches to attract proficient and motivated students. However, facing 21st century demographics of a shrinking student population and greater demand for employable graduates, there is an increase in the need to assess how to find a match between students and curricula, teaching material and learning. This presentation began with an explanation of how evaluation of the depth and breadth of vocabulary knowledge can be used as evidence for validating a set of in-house reading comprehension achievement tests. The methodology and results of the study have valuable implications for curriculum designers, teachers, and language test developers.

To measure the effectiveness of a content-based EFL program, the ability of students to comprehend and retain the content in authentic academic text needs to be evaluated. For this purpose, a pair of reading comprehension achievement tests of three passages that had been covered in class was used. But Hayashi and Sheppard also wanted to learn more about what these achievement tests were actually testing and the interaction between text difficulty with student reading strategies and motivation. Previous research by Coady, Koda, Laufer, Nation, Noro, Quian, and Shimamoto had pointed to various links between vocabulary knowledge and reading comprehension, so they decided to compare the results of the achievement tests with students' scores on Paul Nation's

Vocabulary Levels Test and with classroom observation as external data in a validation study.

The subjects were sixty-one 1st-year university students in three classes. Their ITP TOEFL scores ranged from 367-523 and they were majoring in various fields. A total of three reading passages were used in the two tests. Using Nation's RANGE software to analyze the difficulty of vocabulary in each passage, Hayashi and Sheppard found that the passage in the first 14-item test was easy, with only 5.8% of its vocabulary above the 3k word level, while the two in the 20-item test were more difficult at 15.4% and 13.6%, respectively. From the results of the Vocabulary Levels Test, they identified twenty students out of the sixty-one whose vocabulary knowledge was below the 3000-word level.

SPSS was used to analyze the data in three ways. A correlational analysis between reading comprehension scores with vocabulary knowledge showed that, for the easy passage, mild correlation at around 0.29 dropped to non-significance as the level of vocabulary knowledge went beyond 3,000 words, while for the more difficult passages, the correlation remained stable or increased to reach 0.46. Comparison of groups based on a 3000-word threshold indicated a ceiling effect on comprehension, and use of the Mann-Whitney U Rank Sums test also showed some interaction between vocabulary content, level of vocabulary knowledge, and reading comprehension measured in the achievement tests. To search for possible explanations of these interactions, a cluster analysis was conducted to identify five groups within the matrix of correlations between vocabulary level and reading comprehension scores. In-class observations were applied to look for common traits shared by individuals in each cluster. Among the two groups with low correlation between the two measures, the possible effect of learning style, for instance, rote memorization of vocabulary ala entrance examination preparation, or lack of interest in the topics of the passages were observed.

To this reporter, Hayashi and Sheppard's use of cluster analysis to flag groups for further investigation aided by qualitative data was a very interesting example of how constructs in linguistics, education, and testing can complement each other. The conclusions of the presenters was that for students without an adequate level of vocabulary knowledge, tests of reading comprehension of difficult passages will be testing vocabulary; and there were indications that for such students the focus of study was on vocabulary. It points toward the usefulness of assessing student vocabulary knowledge early on so as to use authentic academic texts and achievement tests with content at an appropriate level of difficulty, and to identify those

students who may profit from remedial instruction in vocabulary related to those texts.

報告者： Jeff Hubbell (法政大学)

シンポジウム

テーマ：「大学英語教育における
英語テストの役割」

司会・提案者： 中村優治 (慶應義塾大学)

提案者： 秋山朝康 (文教大学)

堀口六壽 (東京国際大学)



このシンポジウムでは、3名の先生方がそれぞれ所属しておられる大学での、placement test や assessment test についての発表が行われました。

まず中村先生からは、大学独自の placement test をパイロットテストした結果を主に発表していただきました。古典的テスト理論と IRT 両方によって項目困難度や弁別力を算出し、misfit 項目を除いていくことでより良いテストを作っていく過程を、詳細に教えていただきました。

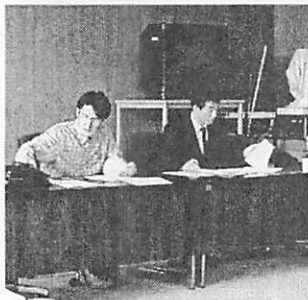
また、秋山先生からは、大学の一般英語の授業では教師によって内容も評価方法も異なるという問題点や、また general English を勉強する2年次までと、English for Specific Purpose に移る3年次以降の関連が薄くなっている、という問題点を教えていただきました。これについては、カリキュラムを組織化していくことや学生のニーズ分析を行うこと、また現在 placement test として使用している CASEC をより有効に利用していく方法を検証することで解決していこうという方向性を示唆されました。また、卒業試験的なテストの可能性を検討していらっしゃるということもお話いただきました。

堀口先生からは、テストは常に誤差が出るものという前提のもと、常に複数のテストを使用すべきだという提案がなされました。また、placement test でクラス分けを行った後でも、学生は自己申告すれば interview test の後にクラスを変えることができるという、東京国際大学独自のシステムについてもご紹介いただきました。また、学生にテストを嫌がらずに受けてもらう

ために、中間テスト、定期テスト、small test などはコメントをつけて採点し、全て 48 時間以内に返却することが教師の義務になっていることもご発表いただきました。3 名の先生からのご発表の後、フロアとのディスカッションでは、placement test でわざと実力を発揮しないで下位クラスに所属して良い成績を取ろうとする学生への対策について、また習熟度別に授業を受講する時間が異なるかどうかについて、また CASEC を使用した感想や CASEC を用いる場合に留意すべきことなどについて、活発に意見が交わされました。

報告者：森本由子 (筑波大学大学院生)

JLTA 第 23 回研究例会の報告



桜舞う 4 月 16 日 (日)、愛知学院大学日進キャンパスで第 23 回研究例会が開催された。午前中は、愛知学院大学の伊藤彰浩氏と愛知みずほ大学の今井隆夫氏の発表が行われ、午後には、英文和訳テストの有効性について、

参加者全員による議論が展開された。

午前中の発表で、第二言語習得の観点から日本人英語学習者の文理解における関係節付与の選好性について調査を行った伊藤氏は、先行研究で英語母語話者が「名詞句 1 + 前置詞 + 名詞句 2 + 関係節」の構造で常に名詞句 2 に関係節を付与する傾向が強かったのに対して、日本人英語学習者は全体として名詞句 1 への関係節付与の偏向があるが、前置詞の種類によって傾向が変わり、前置詞が 'of' の場合は名詞句 1 を、前置詞が 'with' の場合は名詞句 2 を選択する傾向が強いことを確認した。伊藤氏は刺激文が質問文とともにコンピュータ画面に各問 30 秒提示される手順を使って、学習者に基本的な文脈が与えられる刺激文から一定時間内に名詞句 1、名詞句 2 を判定させることで、従来の非文判定テスト法の問題点を改善し、明確な統計手順で、選好性の特徴を明示化することに成功した。フロアからは、談話の流れの中で選好性を分析することへの関心が示されたが、今後の研究の進展が期待される。

認知言語学の視点から文法、イディオム学習の効果に関して調査を行った今井氏は、認知言語学的な学習アプローチを導入したクラスを従

来の方法で学習したクラスと比較して、学習経験が豊富な文法学習においてはわかりやすさ(アンケート)の点で有意差が見られ、透明度の低いイディオム学習においてはテスト得点についても有意に上回ったと報告した。今井氏は今後の指針として、今回の調査に用いた表層的な学習法に対応するテストには限界があり、認知的説明による深層的学習を測定するテスト法の開発が求められる、と結んだ。フロアからはテストだけでなく、プロトコール分析やテキスト分析の手法の活用の可能性も指摘された。



午後には、伊藤氏が雑誌 'System' に発表した英文和訳テストの信頼性、妥当性を検証した研究論文とそれにコメントした今井氏の批評に関する説明を皮切りに、議論が始まった。伊藤氏の研究では、勤務校の入学試験において、採点が困難な下線部和文英訳の自由解答式テストの代替テスト法として開発された、選択式問題の信頼性及び妥当性が検証され、選択式の英文和訳問題が自由解答式とともに読解力の測定に有効である可能性が指摘されている。伊藤氏は、和文英訳の問題がこれまでほとんど研究対象に扱われなかったことが研究に着手した動機であると述べ、研究結果に基づき、コミュニケーションを重視した昨今の英語教育で批判されることの多い文法訳読指導の理念とは切り離して、テストにおける英文和訳問題の有効性が議論されるべきではないか、と問いかけた。参加者からは、下線部和訳は局所的な情報を解釈する力に限定されるので、代名詞の指示内容を日本語で表す問題や大意を要約する形式も必要であること、信頼性、妥当性に問題ないとしても入学試験に多用されることが学習者にマイナスの波及効果を及ぼすことへの危惧、選択式問題において選択肢の容認度を点数化し、部分点を認める提案、CAT への活用の可能性などについて活発な意見が交わされた。

報告者：法月 健 (静岡産業大学)

第 10 回全国研究大会・研究発表募集

来る 10 月 28 日 (土)、29 日 (日)、龍谷大学深草学舎 (京都) において、第 10 回 JLTA 全国研究大会が開催されます。教師や一般の人たちにテストや測定の意義をよりよく理解させるための実践的研究に関する報告を歓迎いたします。

大会テーマ：

Asian Framework における Language Testing
講演：Bernard Spolsky 博士
(Bar-Ilan University 名誉教授)

研究発表申し込み：

発表時間：発表 (30分) + 質疑応答 (10分)

研究発表希望者は、e-mail により、
norizuki@ssu.ac.jp (法月 健) 宛て下記の内容を
送付下さい。(一般発表、一人一発表のみ可)

- 1) 発表概要
(英語の場合：250語、日本語の場合：500字程度)
- 2) 発表者全員の氏名と所属機関
- 3) 発表題目
- 4) 発表者連絡先
(複数の場合は代表者名とその e-mail address)
- 5) 使用機器 (下記リストから選んで回答してください)
 - 特になし
 - PCに接続するプロジェクト
 - OHC (オーバーヘッドカメラ)
 - VCR (VHS)
 - DVD プレーヤー
 - カセット/CD プレーヤー

*発表会場では、持ち込まれた PC の LAN 経由によるインターネット接続はできません。

*PC から動画をプロジェクトに映す場合、機種によっては映らない場合がありますのでご注意ください。

なお、e-mail 送付の際の件名は「JLTA2006 研究発表申し込み」でお願い致します。

発表概要の募集期間：

2006年2月1日(水)～7月1日(土)

発表概要審査結果：

2006年7月22日(土)までに e-mail にてご連絡致します。

展示について

申し込み期限：2006年8月11日
費用：テーブル一脚につき、賛助会員は20,000円、一般は40,000円。

広告について

版下送付期限：2006年7月22日(事務局必着)
費用：A4サイズ1ページが、賛助会員は10,000円、一般は20,000円。半ページが賛助会員は5,000円、一般は10,000円。

展示・広告の詳細については、本学会事務局にお問い合わせ下さい。

JLTA 事務局

(TEL: 026-275-1964 FAX: 026-275-1970
E-mail: youichi@avis.ne.jp)

ELPA / JLTA 「英語評価研究会」

ELPA / JLTA 共催による「英語評価研究会」が以下のように予定されておりますので、ご案内申し上げます。

- 6月17日(土) 福岡県福岡市
テーマ：テスト作成の留意点：古典的テスト理論のデータ分析から
- 7月1日(土) 愛媛県松山市
テーマ：「第二言語コミュニケーション力」をどう捉えるか
- 7月15日(土) 神奈川県横浜市
テーマ：項目応答理論の入り口
- 9月9日(土) 新潟県長岡市
テーマ：テスト作成とデータ分析
- 11月25日(土) 宮城県仙台市
テーマ：言語能力のとらえ方 - 読解能力からのアプローチ -
- 2007年1月13日(土) 兵庫県神戸市
テーマ：テストと大学入試を考える

詳細は ELPA のホームページをご覧ください。
<http://english-assessment.org>

JLTA 2006-2007 年度 役員

- 名誉会長：大友賢二 (筑波大学名誉教授)
会長：Randy Thrasher (沖縄キリスト教学院大学・国際基督教大学名誉)
- 副会長：中村優治 (慶應義塾大学)、浪田克之介 (北海道情報大学)、木下正義 (福岡国際大学)、Steven Ross (関西学院大学)
- 事務局長：中村洋一 (常磐大学)
事務局次長：片桐一彦 (専修大学)
- 理事：Randy Thrasher (沖縄キリスト教学院大学・国際基督教大学名誉)、中村優治 (慶應義塾大学)、中村洋一 (常磐大学)、J. K. Hubbell (法政大学)、木下正義 (福岡国際大学)、清川英男 (和洋女子大学)、浪田克之介 (北海道情報大学)、大坪一夫 (麗澤大学)、Steven Ross (関西学院大学)、根岸雅史 (東京外国語大学)、渡部良典 (秋田大学)
- 運営委員：Randy Thrasher (沖縄キリスト教学院大学・国際基督教大学名誉)、中村優治 (慶應義塾大学)、中村洋一 (常磐大学)、渡部良典 (秋田大学)
- 編集委員：J. K. Hubbell (法政大学)、野口裕之 (名古屋大学)、浪田克之介 (北海道情報大学)、清川英男 (和洋女子大学)、Steven Ross (関西学院大学)、根岸雅史 (東京外国語大学)、Robert Fouser (鹿児島大学)、静哲人 (関西大学)

広報委員：渡部良典 (秋田大学)、清水裕子 (立命館大学)、中村洋一 (常磐大学)、片桐一彦 (専修大学)

新事業企画委員：和田稔 (明海大学)、望月昭彦 (筑波大学)、智原哲郎 (大阪女学院大学)、村上京子 (名古屋大学)、平井明代 (筑波大学)

研究会運営委員：法月健 (静岡産業大学)、伊藤彰浩 (愛知学院大学)、島谷浩 (熊本大学)、中村優治 (慶應義塾大学)、大坪一夫 (麗澤大学)、小山由紀江 (名古屋工業大学)、塩川春彦 (北海学園大学)、藤田智子 (東海大学)、Soo-im Lee (龍谷大学)、林孝憲 (東京経済大学非常勤)、島田勝正 (桃山学院大学)、小泉利恵 (常磐大学)

ワークショップ運営委員会：中村洋一 (常磐大学)、清水公男 (東京都立狛江高等学校)、清水裕子 (立命館大学)、大津敦史 (福岡大学)、柳瀬陽介 (広島大学)、滝沢雄一 (福島大学)

研究助成委員会：服部環 (筑波大学)、島田めぐみ (東京学芸大学)、佐久間康之 (福島大学)、

秋山朝康 (文教大学)、Tim Newfields (東洋大学)

会計監査委員：伊東祐郎 (東京外国語大学)、齊田智里 (茨城大学)

JLTA Language Testing 用語集

事務局、柳瀬陽介 (広島大学)、片桐一彦 (専修大学)、小泉利恵 (常磐大学)

新刊紹介

柳瀬 陽介 (2006) [第二言語コミュニケーション力に関する理論的考察_英語教育内容への指針] 溪水社。ISBN: 4874409121

コミュニケーション能力とは何なのか？言語教育の実践や研究に関わっていると必ず出くわす壁であるが、哲学的言語論を展開しながら、今までの論を検討・分析した書であり、第二言語コミュニケーション力論の歴史と今後を見直すためにも必読！

事務局よりお知らせ

◆ 転勤、転居等、JLTA の名簿記載事項に変更が必要な場合は、速やかに、事務局までご連絡下さい。また、銀行引き落としによる会費納入を利用している会員で、吸収・合併などにより、銀行名、支店名、口座番号等が変更になった場合は、必ず事務局まで、その旨をお知らせ下さい。

◆ JLTAの活動に対するご意見やご要望、Newsletter等への掲載希望記事などがありましたら、事務局までご連絡ください

◆ The JLTA office would be grateful if you could update us on your recent achievements relevant to the field of language testing and evaluation. Any information on your presentations, publications, awards, and so forth would be greatly appreciated. The relevance of the information will be evaluated by the office and given in the newsletter in due course.

◆ 会員の皆様の当該分野での近況をお伝えください。テスト・評価関係本を出版した、論文を発表した、賞を受けた、博士論文を提出した、など。随時報告していきたいと考えております。

編集後記

新学年を向かえ、学ぶ側も教える側も、新鮮な気持ちでスタート。そこに飛び込むのは、英語力の到達目標<値>。英語教員以外からの声が大きい。数値目標を明確にすることは悪いことではないが、その意味するところを無視して踊らされている感が強い。そんな中、自分の教育哲学とは何なのかを考えさせられる本に出会った。JLTA 会員であった木村真治氏 (元・関西学院助教授) の「私とオーストラリア」である。大学卒業後、日本語教師として過ごされた 10 年間に会われた心ある人たちとのエピソードを紹介したエッセイである。<心>を忘れずに、数字と戯れることにする。(ゆ)

木村真治 (2006) 「私とオーストラリア」

文芸社 ISBN: 4-286-01120-8

日本語テスト学会事務局

〒389-0813 長野県千曲市若宮 758

TEL 026-275-1964 FAX 026-275-1970

e-mail: youichi@avis.ne.jp

URL: <http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html>

